

# 「不安」の諸相を理解する視点に関する検討

## — 近年の不安研究を素材として —

筑波大学心理学系 山本 誠一

Examination of basic viewpoints on various aspects of anxiety

Seiichi Yamamoto (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study was to clarify some basic viewpoints on various aspects of anxiety. Recent Japanese studies on anxiety were reviewed. As a result, twenty three basic viewpoints including "viewpoints on implicit or explicit anxiety", "viewpoints on trait or state anxiety", "viewpoints on developmental anxiety or not" etc. were obtained. The great usefulness of those viewpoints to future studies on anxiety is discussed in the conclusion.

**Key words:** anxiety, viewpoints on anxiety, Japanese studies on anxiety, review.

### 問題と目的

19世紀の中頃より、近代思想の崩壊、つまりいわゆる理性の立場からの観点の歴史的挫折を契機に、実存主義哲学や精神分析学などの考えが生まれ、ルネッサンス以来看過されてきたパーソナリティの非合理的で力動的な無意識的部分が再認識され重視されていった。どこか人間的で、漠然とした感じを持ち、明確化への抵抗などの点を特徴とする「不安」に関しても、それまでの「恐怖」という言葉で一括されていた状況から、「不安」の問題(霜山, 1979)として、学問の上でも扱われることになっていった。例えば、実存主義哲学の Kierkegaard(1844)は、「不安とは恐ろしいものへの熱望であり、共感的な反感である。不安は個人を支配する性質の異なる力であって、人はそれを振り払うこともできないし、振り払う意志ももたない。なぜかという、人は恐がるが、しかし恐いものを熱望するからである」と考察し、精神分析学を創始し発展させた Freud, S (1917)は、「不安」のもつ我々人間に取っての重要性を指摘して「不安の問題があらゆる最も重要な問題の集中する交差点であることは確かです。そしてこの問題は、それを解決すれば、私どもの心的生活全体の上に豊かな光が降り注がれるにちがいないと

思われるような、一つの謎なのです。」と述べている。

以来、不安に関する問題は、意識的にしろ無意識的にしろ、不安を扱う人の不安の捉え方の違いにより、様々な側面からの検討が世界中でなされ、今なお精力的に研究が進められている現状である。またこのような不安研究の数の多さとその多様性は、まさに不安という現象の本質が、多義的で不明確でうつろい易い(易変性)という特質と、同時にどの時代でもどんな人間でも経験する、普遍的で不可避の、確実な経験であるという特質を併せもっていることを、反映した結果であると思われる。不安の問題はどこか合理では割り切ることのできない矛盾を含む「人間性」の本質に根ざしているわけである。

ところでこのような不安事態のもつ漠然とした特質により、その定義も一義的には定まらないことになる。例えば、笠原(1993)は精神医学の立場から「漠然とした未分化な恐れ」の感情。しばしば行われる区別によれば、恐怖(fear)がはっきりした外的対象に対するものであるのに対し、不安は内的矛盾から発する、対象のない情緒の混乱で、重いものになると、心的矛盾感覚の極であり、情緒生活の完全な解体である。また破局的状態におかれた有機体の主観的经验を不安と定義することもある [k. Goldstein]。不安は多少とも身体的表出を伴い、動悸、胸部絞扼感、

発汗などから瞳孔拡大に至る多彩な自律神経症状を呈する。……」と説明し、都留(1981)は心理学の立場から「自己の将来に起こりそうな危険や苦痛の可能性を感じて生じる不快な情動現象をいう。恐怖fearと区別しない研究者も多い。しかし、恐怖には特定の対象があり、可能ならばそれに立ち向かうこともできれば回避もできるが、不安は漠然としていて、はっきりとした対象がなく浮遊(浮動free-floating)しているため、これに対しては不明確な危機感・無力感などが生じる。……」としている。さらに霜山(1979)は「……興味深いことには、19世紀にはほとんど不安という言葉は使われていない。その代わりに恐怖という言葉が使われた。それが今日のようになったのは実存哲学と精神分析学の影響による。現在では恐怖は主としてある特定の対象がある場合に用いられ、不安は漠然とした一般的な恐れで、特別な対象をもっていないとされる。しかし、もとよりこの区別は相対的なものであり、例えば死に対する恐怖ということがいえると同時に、あらゆる不安は結局はその背後に死が出没しているということもいえる。……」、また「……不安は人格の成熟度に関係なく、原始的人格にも強いこともある。成全度の高い人格にも強く認められることもある。しかし、この場合、常に不安の質に注目しなければならないであろう。不安の心理学は不安の生理学や哲学、社会学から自由でなければならないが、しかし、これらをも包摂する広い視野においてのみ理解され得る。……また乳幼児期、児童期、青年期、老年期などの不安の質の相違を理解することも必要である。」など、不安は多面的で広がりをもつものであり、ある一つの観点からのアプローチの重要性を認めつつも、さらなる不安理解にはそれにとらわれず広い視野に立つことが不可欠なことを強調している。

本研究では、以上のような多面性をもつ「不安」の諸相を、より総合的な観点から把握できる、幾つかの基本的視点を探求する試みを行うものである。具体的には本研究の目的は、次の2つからなる。つまり最近15年間の本邦での心理学を中心とする不安研究の文献(その実際は文献を参照のこと)をマテリアルとして、1)個々の研究の中で「不安」がどういうものとして捉えられているかという点に焦点を当て、不安の諸相をより総合的に把握し得る幾つかの基本的視点を明確にすること、および2)抽出された諸視点を基にして、今後の不安研究の発展の可能性を展望すること、である。

## 方 法

### 1. 文献検討の方法

まず、今までの不安研究をそのテーマ・アプローチに基づいて大まかに分類し、その後、分類された各ブロック毎にそこに該当する個々の研究・論考が扱っている「不安」というものが、どのようなものであるかを検討し、そこからより総合的な不安把握のための基本的視点を抽出する。この作業をすべてのブロックの個々の不安研究について進め、重複や欠落なくできる限り全体を網羅できるような幾つかの基本的視点を提出する。

### 2. 不安研究の分類と不安把握の基本的視pointsの抽出

最近15年間の本邦での不安に関する研究や文献について、その研究テーマやアプローチ方法に基づいて分類したところ、以下のように8つに分類された。

- ①人間の生に関わる実存的不安や不安自身の意味や意義、価値を扱うもの、哲学的・人間学的な立場からの不安研究。
- ②児童期、青年期、老年期などの各発達段階における特徴的な不安、主に発達心理学・青年心理学・老年期心理学の立場から不安研究。
- ③パーソナリティの文脈で不安を扱うもの、主に人格心理学の立場から不安研究。
- ④対人不安に関するもの、主に臨床心理学・社会心理学の立場からの不安研究。
- ⑤不安を除去、軽減するべき対象とする、心理臨床学・臨床心理学などの立場からの不安研究。
- ⑥教室場面でのテスト不安や促進不安など、主に教育心理学的な立場からの不安研究。
- ⑦不安尺度に関するもの、主に不安を客観的に測定する不安尺度研究の立場からの不安研究。
- ⑧不安を遂行行動・生理指標を用いて研究する、主に実験心理学的な立場からの不安研究。

次に以上の8分類の各分類毎に個々の研究の中で、どのように「不安」を捉えているかについて、吟味検討していく。

(1)人間の生に関わる実存的不安や不安自身の意味や意義、価値を扱うもの、哲学的・人間学的な立場からの不安研究における「不安」の観点。

大宮(1986)は、排除と不安という視点から現代社会論を展開し、理性という一つの面のみを過度に尊重し、自分自身の実感への信頼や自己(他者)を信ずるということ等その他の要素を否認し排除するという、現代の構造こそが、様々な病理や「不安」を生

み出すとし、多義的で曖昧で不安定で矛盾した存在の人間を理解可能とする批判的理性(明析性)が重要だと論考する。ここで扱われている「不安」は、生活感情や時代感覚に近いもので、対象の不明確さ(対象の意識化の程度)という視点からは、不明確さは高く、抽象的なものへの不安で、持続性の点ではその時点の反応性の不安というより今も含めて将来にわたって漂う不安であり、また恐ろしさの強度という視点では、それほど強いものではなく、性格特性ではなく一種の状況不安であると思われる。不安の原因という視点からは、現代社会の構造が不安が生じるもとであるとされている。

三浦(1983)は、「人間の不安、その意味と価値」という論文で、心理臨床と実存主義的な立場のロロ・メイや精神医学者の岩井寛、宮本忠雄・小宮山実、そして哲学的・神学的な立場からティリッヒ、ヤスパーズ、ガブリエル・マルセル、エティエンヌ・ジルソン、ティヤール・シャルダン、V・フランク、そして新訳聖書などの「不安」の定義や説をあげ、自身は「不安とは何かははっきりと分からないが、自分自身の存在の中から生じて来る漠然とした恐れ of 感情である」として、不安とは何か、不安の多様性とその発生原因、不安をいかに対処するか、不安の意味と価値などの諸点から、不安が人間存在や人間的成長にとってどんな点でいかに意義深いものであるかについて詳細に論考している。ここでの「不安」は、広範囲で多種の不安について扱っているので、一つにまとめることは出来ないが、やはりその中心は人間学的・哲学的立場からの不安、つまり現存の不安、実存の不安(死の不安・無意味性の不安・断罪の不安)、形而上学的不安であろう。またこの論考では、特に不安の視点に関する記述も豊富で、正常な不安と異常な不安、急性の不安と慢性の不安、現実の不安と予期不安、原因のわかる不安とわからない不安、現存の不安・実存の不安・形而上学的不安等が挙げられ、示唆的ある。この他に、特性としての不安か状況不安かの視点や発達の不安かの視点、成長促進的か抑制的かの視点(成長不安か抑制不安か)、民族差や性差のあるか否かなどの視点、補充する視点としては考えられるだろう。

吉田・小熊(1988)は、Time PerspectiveとPersonalityとの関連に関する問題を、「実存不安」に焦点を当てて実証的な方法で検討している。ここでは「実存不安」を「不安は、人間存在を考えると、避けることのできない課題であるが、その不安を突き抜け、本来の「実存」に達するための、積極的に意味づけられた不安」のことと定義し、その心的構造として、生命(「生と死の対置」「生の実感」「生

の苦悩」)・しごと(「しごとの価値」「しごとの実感」「しごとの虚無」)・愛(「実感」「かかわり」「出会い」)の3範ちゅう(括弧内はそれぞれの具体的視点)を仮定して、因子分析を用いて検討を進め、実存的な生き方とその不安に関する貴重な知見を得ている。ここでの「不安」は、より人間存在の根本気分に近いものを、実存不安として扱おうとしていると思われる、いずれ死すべき運命にある人間存在の根本的気分としての不安という視点にしっかりと立脚し、実証的な検討を試みている貴重な研究とも考えられるだろう。

(2) 児童期、青年期、老年期などの発達段階における特徴的な不安、主に発達心理学・青年心理学・老年期心理学の立場からの不安研究における「不安」の観点。

松尾(1984)は、児童・青年期の「不安」傾向を、時代背景の変化に伴い、展望がもてなくなり自己の生き方に確信をもてなくなったことによるのではとの仮説から、昭和34年のデータと昭和58・59年のデータを比較し、後年(当時)の方が「不安」感が高まっているかどうかという視点から「不安」を検討し、予想とは逆に「不安」は低下しているという結果を得た。ここでは、GAT(不安傾向診断検査)で測定されるもの、具体的には下位尺度である学習不安、対人不安、孤独傾向、自罰傾向、過敏傾向、身体的傾向、恐怖傾向、衝動傾向が、ここで扱われる「不安」であった。どれも特に顕著には、不安を発達の要因からみる視点が含まれていないことに気がつく。またどちらかという対象や特質の視点では不明確ではなく、了解しやすく、特性的不安か状況的不安かの区別の視点が適さず、精神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的かという視点や対処可能性の視点から見れば、適するもの不適のものが混在していると考えられよう。不安を望ましくないものか否かで見ると、望ましくないといっている点全体に共通していることであろう。

岩脇(1982)は、特性不安か状況不安かの要因(Spielberger)、不安の発達の要因、精神分析的力動的な要因によって不安を捉える長所短所を考慮して、改めて「不安」を誘発する条件(人・場面)の主観的意味あいを検討する重要性を取り上げ、青年期の不安と怒りの内容について発達の分析を行った。主な結果では「不安」を誘発する条件として、人に関する記述が多く、達成に関する不安(自己の能力や所将来に対する不安)、危険な人に対する不安、友人関係の不安の点から考察され、また不安の状況の視点については、11才～19才では顕在的な状況が減少し、潜在的な状況が増加することが発達の傾向

として考察されている。

山本(1992)は、従来の不安を2分類し、「抑制不安」(青年期の人間的成長や自己実現を抑制する不安)と「成長不安」(青年期の人間的成長や自己実現を促進する不安)と命名して、尺度作成の過程を経てその特質を実証的に検討した。この「成長不安」では、その不安を成長促進的か抑制的かとする視点、実存的・人間的な根本的な不安かの視点、発達の不安の視点、不安を意義深いもの(望ましいもの)とみる視点等の基本的視点の存在が指摘できる。

坂田(1981)は、青年の不安と悩みについて、「不安は対象が不明確で、潜在的な混沌状態の継続である」が、「悩みはその解決を迫られるために起こる精神的混乱を示すもの」とし区別しながらも、両者の関係の共通性や流動性も多いことも指摘している。いづれ心配や「不安」な気分となって持続する恐れについて、青年期では具体的なものと想像的なものは減少し、代わって学業の失敗、能力の不足、人前で何かすること、友人を失うこと等、自我に関係のある恐れや社会的な恐れが増大するとしている。ここでの「不安」は、発達の不安の視点や、対象の不明確さの視点(対象の意識化の程度)、対象の具体性—抽象性の視点、不安が短期間か持続的かの視点等から、捉えることができる不安とも考えられる。

田丸・今井(1989)は、青年の古い指向と不安について作成した調査を高校生に実施して検討し、特に「不安」に関しては、対象がはっきりしている不安(勉強に関する不安、自分の将来に関する不安、地球の将来に関する不安、人間関係の悩み・不安、被害に関する不安)と対象がはっきりしない不安(分裂的不安)、体調に現れる不安(顕在性不安)等の不安構造を明らかにした。ここでの「不安」には、結果にも明示されているように対象の不明確さの視点、また精神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的かという視点—つまり不安の表出次元の視点、青年期が不安定な時期であることによる発達の不安という視点、さらに古いとの強い関連が予想される現代という時代や希望をもてない暗い未来への不安—つまり時代精神としての不安という視点、等が含まれていると思われる。

西平(1964)は、「不安」を現代日本青年をもっとも強く動かしている生の基底気分として重視し、また青年の「不安」の中心は、アンナ・フロイドが言うように「強い衝動が、いつ抑圧を破って暴露されるかわからないという不安」であると言う。また小川(1983)も、精神分析学の観点から、青年期(思春期)の「不安」は、第二性徴に伴って出現して来る性

的衝動の高まりによる不安であり、これを抑えるため超自我が発動して超自我不安を出現させ、青年を著しく禁欲的・理想主義的にし、権威者へのエディプス感情も活性化されると言う。これらの「不安」は、発達の不安という視点に加えて、精神分析学の精神力動的な不安の視点(不安の原因の視点の一種)からの捉え方と考えられる。

下伸(1980)は、老人における不安の特性について Cattell, R. B. & Scheier, I. H. が作成した C. A. S. 不安検査を用いて検討し、青年群との比較で、老人群の方が「不安」が低く情緒的に安定している等の結果を得たことを報告している。ここでの「不安」は、C. A. S. 不安検査の下位尺度である Q<sub>3</sub><sup>(-)</sup> 因子(自我感情を吟味する能力)や C<sup>(-)</sup> 因子(自我の強さの欠如)、L 因子(疑い深い)、O 因子(抑うつ的な自罰傾向)、Q<sub>4</sub> 因子(緊張が強くイライラしやすい傾向)という4つの人格因子によって測定されるものであり、まずは老人の不安を特性不安か状態不安かの視点で捉え、また大学生(青年群)との対比を見ている点から、発達の不安という視点も意識していることがわかる。

(3) パーソナリティの文脈で不安を扱うもの、主に人格心理学の立場から不安研究における「不安」の観点。

桑原(1986)は、人格の二面性と不安との関係について、独自の質問紙による測定方法を考案して検討し、人格の肯定的な側面における自己の二面性を意識化しているものは、かえって不安が低い、人格の否定的な側面での自己の二面性を意識している者は、全体的に不安(中でも欲求不安・不満・緊張からの不安)が高いく等の結果を報告している。ここでの「不安」は、C. A. S. 不安検査の結果を不安の測度とし、パーソナリティにおける不安を検討していると考えられることから、まず特性不安か状況不安かの視点の存在を指摘できる。また人格を二律背反的なものとしてでなく、その内にある対立的なものや矛盾をそのまま捉えていこうとする本研究の立場から、ここでの不安に関しても精神力動的に捉えようとする視点の存在は見逃すことは出来ないであろう。

(4) 対人不安に関するもの、主に臨床心理学・社会心理学の立場からの不安研究における「不安」の観点。

小川ら(1979a, 1979b, 1980)や林ら(1981, 1982)らの、対人不安意識に関する一連の研究では、対人恐怖的心性を意識的な次元から様々な「悩み」という点で尺度化し、様々な側面から検討を行い、例えば対人不安は幼少期の家族や他者等との人間関係が

大きな影響力を及ぼしている等の結果を報告している。菅原(1992)は、対人場面で他者の視線を意識する中で感じる「はずかしい」「照れる」「あがる」など羞恥感という概念に代表される不安感を社会心理学的な文脈から、対人不安(social anxiety)として捉え、収集した事例についてクラスター分析による類型化を試み、従来の対人恐怖や「恥」の研究、Emmbarrassment, Audience anxiety, Shynessの研究における類型との比較を行うなどして、示唆に富む報告を行っている。

以上の各研究の「不安」については、例えば小川ら(1979a, 1979b, 1980)や林ら(1981, 1982)の研究では、対人不安心性という言葉に象徴されるように、対人不安をむしろ人の特性的なものとして捉えているようであり、一方、菅原(1992)の脚注では「対人不安を特定の対人場面における情緒的反応あるいは状態を示すものとして扱いたい」とあり、このような点からも、ここでの「不安」の視点に関して、まずは特性不安か状況不安かの視点の存在が明らかであろう。また対人不安は単に人がこわいのではなく、どこかで評価される等のある特殊な条件をもった対人的な状況が問題なのであるから、不安の対象の不明確さ(対象の意識化の程度)という視点での検討も有効と思われる。さらに、不安のおそろしさの強度という視点、他者による了解性の視点、病的可否かの視点、対人不安特性の起源や形成等の原因の視点、対処可能性の視点、不安の持続期間が短期か長期かの視点、精神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的かという視点—つまり不安の表出次元の視点、また正常な青年期にもその徴候が見られること等から発達的な視点、民族による違いの視点、等々の視点からこの対人不安を捉えて、より検討を深めていくことも意義深いものであろう。

(5)不安を除去、軽減するべき対象とする、心理臨床学・臨床心理学などの立場からの不安研究における「不安」の観点。

松橋・生月(1991)は、慢性不安を伴う電話時の吃音の治療の実際例を報告し、そこで他者暗示を併用した自律訓練法が慢性不安の軽減に有効である等の結果を得ている。ここでは「不安」を「自律性の心理的な慢性症状」という観点で捉え、除去あるいは軽減すべき治療対象としている。対象の不明確さの視点では、比較的に明確なものと捉えられ、他者暗示を併用した自律訓練法が有効なことから対処可能性の視点では対処可能と捉えられ、不安の持続性の視点では慢性的という点から長期的と捉えられていると考えられる。また不安の表出次元つまり、精神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的かという視点

ではすべてを含むと判断されよう。また不安の原因に関する視点でも明確なものと思われる。

前田(1986)は、児童の不安・恐怖の消去におよぼす弛緩訓練の効果を検討するために、不安・恐怖を示す2名のクライエントに対して、原野(1977)の弛緩訓練を用いた現実脱感作療法を適用し、結果としてこの弛緩訓練を用いた拮抗制止法が児童の不安・恐怖反応の消去には有効であることを示した。ここでの「不安」も、不安を取り除くべき目標対象であり望ましくないものという視点で扱い、対処可能性の視点、原因の視点などを含んでおり、松橋・生月(1991)で既述した不安の諸視点とほぼ同様の視点で、不安が扱われていると考えられる。

山本力(1992)は、心理臨床学的・精神分析的・対象関係論的な観点から、分離不安障害を根底にもつ青年期女性が強い分離不安や抑うつ状態から回復していった面接過程を臨床素材として、分離不安を単独の状態でなく、いわゆる「いないいないバア」過程の局面として検討し、分離不安は心理的・内的喪失体験であり、信頼のまなざしの下での「目守り」の剝奪体験であること、また分離不安は再結合の希求をもたらし、面接者との再会によって自己の再獲得が図られこと等の、仮説的理解を得た。また北村(1986)も、精神分析的・対象関係論的な観点から、登校拒否児の母子面接の検討を通して対象喪失の不安と対象恒常性に関する論考を行っている。この2研究での「不安」は、どちらも心理臨床学的・精神分析的な観点から「不安」を捉えている点がその特徴である。不安の視点という点からは、不安の起源・原因の視点、発達の視点、特性か状況かという視点、精神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的かという視点、不安感の意識度という視点(どの程度潜在的な不安か顕在的な不安か)、不安のもつ個人の人格発達や人生における意味という視点、望ましくないものか否か視点、取り除くべき目的対象か否かの視点等、を含んだものと考えられることができるだろう。

(6)教室場面でのテスト不安や促進不安など、主に教育心理学的な立場からの不安研究における「不安」の観点。

高橋(1981)は、児童のテスト不安の高さの規定要因に関する検討を行った。テスト不安の測度にはSarason, S. B.ら(1958)のTASC、抑制的な不安だけでなく促進的な不安の側面をも測定尺度にもつAlpert, R.ら(1960)のAAT、さらに自作の算数・音楽テスト不安尺度で、テスト不安の規定要因の測度は、テスト成績への自己認知、教師の希望成績に対する子どもの認知、本人の成績への期待等であった。主な結果として、自己成績認知を低く見積る者、自己の

成績と第三者からの希望や本人の希望とのズレの大きいものは、それぞれテスト不安が高い傾向にある、等の知見が報告された。

三野(1989)は、テスト問題の配列と難易度に着目して、テスト不安とパフォーマンスに関する検討を行い、主な結果としてテスト不安の高いものは遂行成績に関して配列の影響を受けやすく、テスト問題がやさしいものから難しいものへと配列されることが望ましいこと等、が示された。また島田・今林・池田(1988)も教育心理学的な観点から、青年期の前期にあたる中学生を対象に、テスト不安に及ぼす課題困難度と自我関与度(動機づけ)の効果を検討し、テスト不安が学習に妨害的に働くなど従来の研究結果を支持する知見のほか、有意義な知見を報告している。

以上の研究でのテスト不安の定義はどれもほぼ同様で共通項をまとめると、テスト場面やそれと類似した場面など評価を含む課題事態で生じる不安、と捉えている。「不安」の視点に関しては、対象の不明確さの視点(一応、対象がテストであるという点では明確)、短期か長期化の視点、他者による了解性の視点、病的か正常かの視点、望ましくないものかの視点、取り除くべき目標対象かどうかの視点、特性不安か状況不安かの視点、生理的覚醒(一過性の情動)か持続的気分かの視点、対処可能性の視点、不安の表出次元の視点、不安の原因の視点等、が含まれていると考えられる。

(7)不安尺度に関するもの、主に不安を客観的に測定する不安尺度研究の立場からの不安研究における「不安」の観点。

大村(1981)はTaylor, J. A.の顕現性不安尺度(MAS)に関して、自身の一連の研究を含む内外のおもに因子分析による研究を整理し、その知見を踏まえて自らの因子分析の研究によるMASの基本的因子結果の妥当性を確認し、また精神疾患者の結果から不安の分化度(一種の明瞭性)が健康な不安かどうかの目安となることを示唆する等の知見も報告している。

平井・岡安・芦田(1987)は、最近の不安尺度研究の動向を概観して、元来不安動因説を基に作成され、後には特性不安に焦点を当てて不安を測定しているとされるTaylor, J. A.のMAS(顕現性不安尺度)から、情動・感情の認知理論から発展したSpielbergerの状態-特性不安理論による、状態不安と特性不安を分けて測定できるSTAIへの流れを指摘し、次の発展の一つの方向として、状態不安は個人のその多次元な特性不安と状況と相互作用によって決定されるとするモデルをもとにEndler, N.

S. & Okada, M.(1974)が作成したS-R GTAについて言及し、その日本語版作成を試みている。

岩永(1988)は、先行研究の検討から不安反応の表出次元の多様性を考慮することの重要性を指摘し、Schwartzら(1978)の認知的不安反応と身体的不安反応の2次元を別々に測定する尺度CSAQから、次元を3つに増やして認知・生理・行動の3要因モデルに基づく不安尺度の作成を試みた。

以上の研究で特に特徴的な「不安」の視点については、特性不安か状態不安かの視点、どのような場面・状況での不安かという視点、不安の表出次元の視点つまり精神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的かという視点、不安感の意識度という視点(どの程度潜在的な不安か顕在的な不安か)等が指摘できるような。

(8)不安を遂行行動・生理指標を用いて研究する、主に実験心理学的な立場からの不安研究における「不安」の観点。

寺崎(1981)は、不安の実験心理学の観点から、人格特性としての特性不安(Spielberger, C. D.)とストレッサーの型との関係を検討するため、非自我脅威的事態としてノイズ音という物理的ストレッサーを用いて、MASによる高不安者と低不安者の作業遂行に及ぼす影響を比較した。主な結果としてMASの高不安者は、高動因を保持しているわけでないこと、すべての種類のストレス場面で、常に不安を喚起しやすい個人であるとはかぎらないこと等が指摘された。

また大河内・坂野(1985)は、実験心理学的・認知行動論的な観点から、物理的・主観的な対処行動実行困難度が、状態不安尺度(STAIより)および生理的反応(心拍)により測定される状態不安(一種のストレス反応)喚起に及ぼす影響を検討し、主な結果として、対処行動の実行が困難である場合、容易な場合より高い生理的覚醒が対処行動前に喚起されることが示された。

吉田・岩永・岩崎(1988)は、やはり実験心理学的な観点から、身体的危機状況と自我脅威状況からなる2つの不安喚起事態を設けて、その事態で喚起される不安(心拍水準と心拍変動性という生理的覚醒が指標とされた)の差異を検討し、主な結果として身体的危機刺激で電撃よりも、自我脅威刺激である他者による観察下でのボルノ呈示の方が高い不安を喚起することが示された。

以上の研究でとりわけ特徴的な「不安」の視点については、やはり特性不安か状態不安かの視点、どのような場面・状況での不安かの視点(不安を誘発する条件の視点)、不安の表出次元の視点つまり精

神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的かという視点, 生理的覚醒(一過性の情動)か持続的な気分かの視点, 対処可能性の視点, 望ましくないもの否かの視点, 等をあげることができるだろう。

### 結果および考察

以上の文献的な検討から得られた「不安」を把握する上での幾つかの基本的視点を整理し並べると, 以下ようになる。(なお, 特に関連すると思われる視点に関しては, 同じ英文字に番号を符している。)

- a-1) 不安対象の不明確さ(対象の意識化の程度)という視点
- a-2) 不安対象の特質が具体的なものか抽象的なものかという視点
- a-3) 不安対象が今現在の事象か近未来予想の事象かという視点
- b) 不安の表出次元の視点(精神的(認知的)か身体的(生理的)か行動的か)
- c-1) 短期か長期かという持続性の視点
- c-2) 生理的覚醒(一過性の情動)か持続的な気分かの視点
- d) 恐ろしさ・こわさの強度という視点
- e) 不安の意識度の視点(潜在的不安か顕在的不安か)
- f-1) 他者による了解可能性の視点
- f-2) 病的か正常かという視点
- g) 性格傾向(特性不安)か状況不安かという視点
- h) どのような状況・場面での不安かという視点
- i) 発達の不安という視点
- j-1) 人間の生と不可欠の根本的・実存的な不安かという視点
- j-2) 個人の人格発達や人生における不安の意味を考える視点
- j-3) 意義深い不安かどうかという視点(成長促進的な不安か抑制的な不安か)
- k-1) その不安が望ましくないものかどうかの視点
- k-2) 取り除くべき目標対象かどうかの視点
- l-1) 不安の起源・原因を考える視点(哲学的人間学的な考え・精神分析的力動的な考え・行動主義的学習理論の考え・認知理論の考え等)
- l-2) 対処可能性(対処可能か困難か)の視点
- m) 対人不安という視点(羞恥・観衆不安等の社会心理学的な social anxiety, 対人恐怖傾向等の臨床心理学的な対人不安)
- n) 民族による不安の違いという視点

- o) その時代のもつ時代精神による不安

以上のような「不安」把握の基本的視点を得たわけであるが, これらの視点は, ただ単に従来の或はこれからの不安研究や「不安」そのものを, より総合的に把握できるだけではない。換言すれば各不安研究で扱われている「不安」を不安に関わる現象の全範囲(いわば「不安空間」とも呼べる)の中で位置づけられる可能性をもつだけでないと考えられる。すなわち, 例えばMASの不安動因理論の考えを, 不安が望ましいものか否かの視点で検討したり, 実存的根本的な不安の視点と成長促進的な不安の視点の関係の検討をはじめ, 除去すべき不安の視点と不安の意味・意義の視点の関係, 対象の不明確さ(意識化の程度)と対処可能性の視点や不安の表出次元の関係, また不安の了解可能性の視点と, 不安の起源や原因の視点や恐ろしさ・こわさの強度(脅威として感ずる度合)との関係, 対人不安の視点と発達の不安の視点との関係, 等々の異なる“視点間”の異同や(不安空間全体の中での位置)関係の検討, さらに同じ視点内で反対の極にある研究同士の「不安」の質の違いの検討(いわば“視点内”の対極不安の検討)を試みることは, 新しい不安の知見を得る上で意義深いことと思われる。これは不安研究の今後に残された大きな課題であろう。

今後の不安研究に望まれることの一つは, 各々の不安研究者がこれまでの自分の「不安」の捉え方のパターンを, 本研究で抽出された諸視点などを参考にして改めて検討し, 自分の「不安」がどこに位置づけられる不安なのか認識し, さらに他の視点を含む異なる不安研究との有機的な関連を考慮しつつ, 不安研究を深化発展させていくことではないだろうか。

なお, 可能な限り数多くの文献について言及するつもりであったが, なお触れ残した論文が少なからずあった。また, 筆者の見落としした重要な文献もあると思われる。さらに, 今回取り上げた各不安研究に関して筆者自身による誤解や理解の浅さも, 危惧するところである。御教示願えれば幸いである。

### 要 約

本研究の目的は, 本邦の過去15年間の不安研究で扱われている各々の「不安」の特質の検討を通して, 多面性をもつ「不安」の諸相をより総合的に把握することのできる基本的視点を, できる限り抽出し明確にすることであった。研究テーマやアプローチの違いによって大きく8分類された過去の不安研究の

各々について、取り扱われている「不安」に焦点を当て様々な側面からの検討がなされ、基本的視点が抽出された。結果として、不安の意識度の視点(潜在的な不安が顕在的な不安か)、性格傾向(特性不安)か状況不安という視点、発達的な不安という視点など、不安の把握に役立つ23個の基本的視点到に整理された。まとめとして、これらの基本的な不安視点的今後の「不安」研究発展への有用性が討論された。

## 文 献

- 阿部洋子 1980 不安傾向形成要因に関する一考察 人間研究 **16** 53-86.
- A. ゲゼル 1972 心配と不安(新井ほか訳)ゲゼル心理学シリーズⅢ 青年の心理学 家政教育社 410-412.
- 安藤清志・堺 忠宏・渡辺浪二 1977 親和—距離不安尺度日本版の作成 日本心理学会第41回大会発表論文集 **115**
- 荒木紀章 権 五勲 1992 小学生における不安の研究—韓国における学校内不安とテスト不安について 日本心理学会第56回大会発表論文集, 412
- 遠藤辰雄 1964 不安定感・不安感・劣等感(望月編)現代の青少年2 転機 誠信書房 91-97.
- Freud, S. 懸田・高橋(訳)1971 精神分析入門 人文書院(Freud, s. 1916 *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*)
- 藤井義久 1991 テスト場面に応じた不安の測定 日本心理学会第55回大会発表論文集 632
- 藤岡千秋 稲岡弘子 1986 中学生の不安傾向に関する検討—1— 大阪教育大学紀要V 教科教育 **35**(1) 109-119.
- 深谷和子・植木陽子 1986 母親の示す育児不安に関する一考察 東京学芸大学紀要 第一部門 教育科学 **37** 253-261.
- 福島 章 1981 笠原嘉著「不安の病理」—正常と異常の境界を平易に解説 エコノミスト59(33) 144-146.
- 福島修美 1970 青年の悩みと不安 現代青年の意識と行動2(斎藤耕二編)生活感情の展開 大日本図書 163-192.
- 福井康之 1980 青年期の不安と成長: 自己実現への道 有斐閣
- 浜 治世編 1980 不安<特集> 心理学評論 **23**(3) 209-334.
- 浜田駒子・今村義正・荻原公正 1989 不安傾向にあるN君のケースについて 学生相談研究 **10**(1) 41-52.
- 橋本橋夫・中沢千鶴加 1990 時間不安と自我同一性、達成動機、および自己像との関係 千葉大学教育学部研究紀要 **38**(1) 47-54.
- 服部 智・吉田昭久・小熊 均 1990 「自己受容」の基底因—実存不安との関連の分析的検討 茨城大学教育学部紀要 教育科学 **39** 199-216.
- 平井 久・岡安孝弘・芦田久美子 1987 最近の不安尺度の傾向—日本語版S-RGAT〔S-R Inventory of General Trait Anxiousness〕作成の試み 上智大学心理学報 **12** 15-24.
- 平田賢一他 1992 コンピュータ不安に及ぼす情報教育の効果 愛知教育大学研究報告 教育科学 **41** 197-204.
- 本間恵美子 1990 対人不安心性に関する予備的考察 函館大学論究 **22** 1-18.
- 本間恵美子 1991 老人不安と社会的課題の評価—友人関係に関する諸経験をめぐって 函館大学論究 **23** 1-17.
- 池田博和 1981 ある不安神経症者の心理療法過程—心の故郷への回帰と新たな出発 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 **28** 281-293.
- 今田 寛 1975 感情心理学3 恐怖と不安—情動と行動Ⅱ— 誠信書房
- 今井恵子 1980 成功不安に関する一研究 日本心理学会第44回大会発表論文集 68
- 今井俊一・島田俊英・井立田章子 1988 テスト不安に関する教育心理学的研究—2—テスト不安と学習適応性を中心に 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 **40** 345-356.
- 井村 仁 1982 アドベンチャー・プログラム経験が中・高校生の自己概念と不安に及ぼす影響 筑波大学体育科学系紀要 **5** 59-70.
- 石原慶子・児玉昌久 1988 犯罪行動と不安—男子受刑者の不安の特徴から— 犯罪心理学研究 **26**(1)
- 石原慶子・児玉昌久 1991 犯罪者の性役割認知の研究(3)—性役割パーソナリティと不安— 犯罪心理学研究 **29**(1)
- 岩永 誠・生和秀敏・横山博司 1984 不安に関する実証的研究(13) 日本心理学会第48回大会発表論文集 638
- 岩永 誠・生和秀敏・横山博司 1985 不安に関する実証的研究(19) 日本心理学会第49回大会発表論文集 683
- 岩永 誠・生和秀敏・横山博司 1986 不安に関する実証的研究(24)—指標間差異に関する検討その2— 日本心理学会第50回大会発表論文集 60

- 岩永 誠 1988 3要因モデルに基づく不安尺度作成の試み 作陽短期大学研究紀要 **21**(2) 1-12.
- 岩脇三良 1982 青年期における不安と怒りの発生場面 中京大学文学部紀要 **16** 57-74.
- 笠原敏彦 1990 青年期における神経症的病態の特徴 不安神経症 臨床精神医学 **19**(6) 759-762.
- 笠原敏彦 1992 対人恐怖症と不安 臨床精神医学 **21**(4) 669-675.
- 笠原 嘉 1993 不安 加藤・保崎・笠原・宮本・小此木他(編) 新版 精神医学事典 弘文堂 690-691.
- 川崎 仁 1993 <特集> 不安とつきあうセルフ・ナーバス・シンドローム「他人からどう評価されているか不安」症候群 「ひと」 43-49.
- Kierkegaard, S. 斎藤信治(訳) 1979 不安の概念 岩波新書 (Kierkegaard, S. 1844 *Der Begriff der Angst*)
- 木村由美子 1992 分離不安テストを用いた基礎的研究 日本心理学会第56回大会発表論文集 286
- 北川文男 1980 安定不安定感情群—感情語による検討 和歌山大学教育学部紀要 教育科学 **29** 133-142.
- 北村圭三 1986 対象喪失の不安と対象恒常性—登校拒否児の母子面接を通して 神戸女学院大学論集 **33**(1) 107-121.
- 小林純一 1973 不安と創造性 岩崎学術双書19 岩崎学術出版社
- 小玉正博 1987 不安障害の治療過程から見た自己統制脱感作法の臨床的検討 教育相談研究 **25** 1-10.
- 古賀愛人 1979 不安の因子分析的研究 園田学園女子大学発表論文集 **14** 37-52.
- 古賀愛人・寺崎正治 1985 大学生における特性不安の年度変化(1) 日本心理学会第49回大会発表論文集 685
- 河野義章 根本恵美子 1984 競争と二種類の不安 福岡大学教育学部論集 **36**(教育・心理) 1-7.
- 越 良子・坪田雄二 1990 母親の育児不安と父親の育児協力との関連 広島大学教育学部紀要 **139** 181-185.
- 黒丸正四郎 1984 不安について 甲南女子大学研究紀要 創立20周年記念号 716-669.
- 桑原知子 1986 '不安'と'人格の二面性'との関係について 心理臨床学研究 **3**(2) 83-89.
- 教師養成研究会青年心理学部会 1980 情緒の緒相：あこがれと孤独感—不安と悩み—優越感と劣等感—愛情と嫉妬—怒りと正義感—喜びと生きがい感 最新青年心理学 学芸図書 55-62.
- Leary, M. R. 生和秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房
- McCandless, B. R., & Coop, R. H. 林謙治(監訳) 1985 不安と防衛機制 思春期—その行動と発達の手づかき メディサイエンス 423-426.
- 前田基成 1986 児童の不安・恐怖反応の消去におよぼす弛緩訓練の効果 相談学研究 **19**(1)
- 正木健雄他 1991 子どもたちの現在<特集> 教育 **41**(10) 6-61.
- 松井三枝 1990 対人不安と対自他認知体系—Self identity Systemの検討 心理学研究 **61**(2) 94-102.
- 松村千賀子 1992 不安と予測に及ぼす不合理的信念の効果 教育心理学研究 **40**(1) 10-19.
- 松尾祐作 1984 児童期・青年期における不安傾向 福岡教育大学紀要 **4** 教職編34 153-158.
- 松尾祐作 1985 児童期における不安傾向の年間変動 福岡教育大学紀要 第4部 教職編 35 173-176.
- 松崎英士 1985 利き手と不安水準をめぐる問題 教育研究 **29** 49-66.
- 松崎敏正・生月 誠 1991 慢性不安を伴う電話時の吃音の治療例 カウンセリング研究 **24**(1) 45-48.
- 三村 旬 1989 不安に及ぼす催眠暗示の効果について 日本心理学会第53回大会発表論文集 373
- 三根 浩・三根久代・浜 治世 1985 両親のしつけ行動とテスト不安 日本心理学会第49回大会発表論文集 689
- 三根 浩・浜 治世 1981 テスト不安測定のための試み 日本心理学会第45回大会発表論文集 581
- 大村政男 1981 顕現性不安(Manifest Anxiety)の因子構造 日本心理学会第45回大会発表論文集 582
- 三根 浩・三根久代・浜 治世 1982 テスト不安尺度の構成妥当性 日本心理学会第46回大会発表論文集 311
- 三根 浩・三根久代・浜 治世 1986 子どものテスト不安と両親の養育行動との関係 日本心理学会第50回大会発表論文集 609
- 三野誠登 1989 テスト不安とパフォーマンスに関する研究—問題の配列と難易度に着目して— 教育心理学研究 **37**(3)
- 三浦 功 1983 人間の不安, その意味と価値 ノートルダム清心女子大学紀要 文化学編 **7**(1) 29-44.

- 宮城音哉 1968 不安について 人間性の心理学  
岩波新書 51-60.
- 三宅俊治・陶山 智・三島勝正・松本卓三・米田博  
1992 現代青年の悩みと不安に関する調査研究  
(3) 日本心理学会第56回大会発表論文集 91
- 宮崎和夫・北風公基 1991 緊張と不安の關係の研究—試験の直前の場合を中心に 親和女子大学  
研究論叢
- 持丸文雄・印出秀二・深津千賀子 1986 妊婦の不安 周産期医学 16(8) 1239-1244.
- 鍋倉正信・大島吉晴・茨木みちよ・清水千恵 1987 青年期における自己開示と自意識並びに社会的不安との関連についての研究 日本心理学会第51回  
大会発表論文集 525
- 中里 弘・佐藤哲男 1978 不安ヒステリーの精神療法における夢日記の導入の試み 日本心理学会  
第42回大会発表論文集 1120-1121.
- 中里克治・下仲順子 1989 成人前期から老年期にいたる不安の年齢変化(資料) 教育心理学研究 37(2) 172-178.
- 中山信夫 1985 大学受験生の不安の構造—CASよりみた不安を中心に 阪南論集 人文 自然科学編 21(2) 19-29.
- 西平直喜 1964 感傷性・感動と感激・不安 青年分析—人間形成の青年心理学— 大日本図書 121-128.
- 小川捷之・林洋一・永井徹・白石秀人 1979a 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(1)—比較文化的視点から 横浜国立大学教育紀要 19 205-220.
- 小川捷之・永井徹・白石秀人・林洋一 1979b 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(2)—地域性および幼少期における家族以外との接触・非接触の観点から 横浜国立大学教育紀要 19 221-239.
- 小川捷之・木村方美・林洋一 1980 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(3)—幼少期の家庭環境と自己環境と自己像に関する比較文化的検討 横浜国立大学教育紀要 20 60-77.
- 林洋一・小川捷之 1981 対人不安意識尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センタ年報 1 29-46.
- 林洋一・小川捷之 1982 対人不安意識尺度構成の試み—その2 横浜国立大学保健管理センタ年報 2 19-37.
- 小川捷之 1983 不安と神経症(依田・安香編) 青年心理学入門改訂版 新曜社 186-208.
- 小川隆章 1976 テスト不安の調査研究 日本心理学会第40回大会発表論文集 887-888.
- 生越達美 1981 青年の不安(田中編)現代青年の心理 建帛社 111-132.
- 岡村豊太郎 1985 不安の抑制に及ぼす身体運動の効果—受験生活によって喚起された不安抑制に及ぼす運動クラブ経験 山口大学教育学部研究論叢 3 芸能・体育・教育・心理 35 205-218.
- 大平典明 1989 樹木画テストの不安指標 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇 40 267-277.
- 大井正己 1992 青年期の不安 臨床精神医学 21(4) 555-560.
- 大河内広人・坂野雄二 1985 状態不安喚起におよぼす対処行動の影響 千葉大学教育学部研究紀要 34(1) 55-67.
- 大宮 登 1986 <排除>と<不安>の構造 三田商学研究 29(2) 59-74.
- 大村政男 1980 不安における促進的なものと減弱的なもの 日本心理学会第44回大会発表論文集 524
- 大村政男 1980 顕現性不安尺度(MAS)に関する研究—MASの因子分析的研究 日本大学人文科学 研究所研究紀要 25 197-228.
- 大村政男 1985 新しい顕現性不安尺度についての研究 日本大学人文科学 研究所研究紀要 31 152-173.
- 大村政男・福屋武人 1992 大学新入生の不安と煩悶 日本心理学会第56回大会発表論文集 160
- 長田由紀子 1993 高齢者の回想と死の不安の關係について 日本発達心理学会第4回大会発表論文集 240
- 坂田一ほか 1967 不安と悩み 青年期の理解—人格形成の心理学— 福村出版 80-83.
- 坂田 一 1981 不安と悩み(津留編)教職心理学講座 3 青年心理学 第一法規出版 66-71.
- 佐藤貴美子 1993 母親の不安意識と育児様態 日本発達心理学会第4回大会発表論文集 117
- 清野美佐緒 1983 大学生に対する集団指導と不安のコントロールについて 日本心理学会第47回大会発表論文集 681
- 生和秀敏・横山博司・岩永 誠 1986 不安に関する実証的研究(25) —他者共在事態での嫌悪度決定要因— 日本心理学会第50回大会発表論文集 607
- 生和秀敏 1992 時間不安測定尺度の構成 日本心理学会第56回大会発表論文集 100
- 生和秀敏・横山博司 1983 不安に関する実証的研究(8) 日本心理学会第47回大会発表論文集

- 645
- 生和秀敏・岩永 誠・横山博司 1984 不安に関する実証的研究(12) 日本心理学会第48回大会発表論文集 637
- 生和秀敏・岩永 誠・横山博司 1985 不安に関する実証的研究(20) 日本心理学会第49回大会発表論文集 684
- 柴田利男 1988 身体満足度が対人的不安感および自己開示に及ぼす影響 日本心理学会第52回大会発表論文集 156
- 柴田利男 1990 青年期の身体満足度が対人不安および自己開示行動に及ぼす影響 心理学研究 **61**(2) 123-126.
- 島田俊秀・今林俊一・池田 浩 1988 テスト不安に関する教育心理学的研究—1— テスト不安に及ぼす課題と自我関与的教示の効果 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 **40** 321-344.
- 島崎敏樹 1960 不安の克服 心でみる世界 岩波新書 166-179.
- 清水秀美・平田賢一・今栄国晴 1976 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの標準化 日本心理学会第40回大会発表論文集 889-890.
- 下仲順子 1980 老人における不安の特性 老年心理学研究 **6**(2) 61-72.
- 霜山徳爾 1979 不安 依田新(監) 新・教育心理学事典 金子書房 688-689.
- 塩田祥子 1993 高校生における、学習に関する認知の探索的研究—テスト不安傾向と認知との関連 日本発達心理学会第4回大会発表論文集 222
- 曾我祥子 1991 不安と怒り 日本心理学会第55回大会発表論文集 633
- 曾我祥子 1993 不安と怒りの研究(Ⅳ) 日本発達心理学会第4回大会発表論文集 292
- 孫 旭形 1991 態度に関する研究—中国と日本との比較 カウンセリング研究 **24**(2) 101-110.
- 菅原健介 1989 対人的不安の類型化に関する研究 人文学報(東京都立大学人文学会編) **205** 91-107.
- 菅原健介 1992 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究 **7**(1) 19-28.
- 菅原健介・笹山郁生 1991 「観衆不安」をめぐる諸現象の分析—2—ミュージカル、落語、オーケストラ、ディベート等の経験者に対するグループインタビューの分析から 人文学報 **223** 123-144.
- 杉原保史 1985 テストによる評価が内発的動機づけに及ぼす影響—テスト不安との関係において— 教育心理学研究 **33**(3)
- 張 日昇ほか 1993 日中青年の心理的不安に関する比較研究(2)—結果及び考察— 日本発達心理学会第4回大会発表論文集 227
- 高木秀明ほか 1993 日中青年の心理不安に関する比較研究(1)—目的及び方法— 日本発達心理学会第4回大会発表論文集 226
- 高橋君江 1981 児童におけるテスト不安の規定因に関する研究 日本女子大学紀要 家政学部 **28** 9-15.
- 高橋君江 1993 テスト不安に関する研究—賞賛・叱責と学業成績との関係— 日本心理学会第47回大会発表論文集 564
- 高橋君江 1984 児童におけるテスト不安の規定因に関する研究—賞賛・叱責の経験との関係— 日本女子大学紀要 家政学部 **31** 23-28.
- 高橋脇子 1980 不安—親和に関する実験的研究 日本心理学会第44回大会発表論文集 690
- 田丸敏高・今井八千代 1989 青年期の占い指向と不安 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 **31**(1) 225-260.
- 田代信雄他 1984 ストレスと不安<特集> 教育と医学 **32**(5) 448-527.
- 寺崎正治 1981 高不安者と低不安者の作業遂行におよぼす白色雑音の影響 心理学研究 **52**(1) 53-56.
- 寺崎正治・古賀愛人 1985 大学生における特性不安の年度変化(2) 日本心理学会第49回大会発表論文集 686
- 遠山尚孝・千葉良雄・末広晃二 1976 不安感情—特性尺度(STAI)に関する研究 日本心理学会第40回大会発表論文集 891-892.
- 土屋明夫 1980 自他と分化と不安定感(関忠文編)青年心理学 福村出版 59
- 都留春夫 1981 不安 新版・心理学事典 平凡社 740
- 堤 雅雄 1988 自己不安への一接近—Higginsの自己差異理論を通して 島根大学教育学部紀要 人文・社会科学 **22**(2) 127-132.
- 堤 雅雄 人格の二重性の諸相—羞恥心性と対人不安心性を中心として 島根大学教育学部紀要 人文・社会 **21** 21-27.
- 辻平治郎 1984 自己意識と対人不安 日本心理学会第48回大会発表論文集 636
- 上野弘司 1988 不安とSCT反応の関係について 日本心理学会第52回大会発表論文集 132
- 梅田秀彦・高橋 徹 1980 弱者からのメッセージ

- 青年期の対人不安 — 太陽出版
- 山田良一 1986 分離不安を主症状とする女子高校生の事例 山梨大学教育学部研究報告 人文社会科学系 **37** 90-97.
- 八巻香織 1992 <特集> 蝕まれ、漂白される子どもたち 子どもをゆさぶる不安 中学生からの手紙相談 「ひと」238 47-53.
- 山本誠一 1988 青年期における不安の二側面 — 「成長不安」と「抑制不安」の検討 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 430-431.
- 山本誠一 1989 青年期の不安と人間の成長 — 「成長不安」尺度の検討 — 日本教育心理学会第31回総会発表論文集 207
- 山本誠一 1990 青年期における成長不安と悩みの関係 発達心理学会第1回大会発表論文集 153
- 山本誠一 1990 青年期の成長不安と対人態度 日本心理学会第54回大会発表論文集 143
- 山本誠一 1991 青年期における成長不安の規定要因 — 自我の強さ・自尊感情の観点から 日本発達心理学会第2回大会発表論文集 214
- 山本誠一 1991 青年期の成長不安と価値観(生き方) — 学年によむ関連性の差異に関する発達の検討 — 日本心理学会第55回大会発表論文集 549
- 山本誠一 1992 青年期における不安の2側面に関する実証的検討 心理学研究 **63**(1) 8-15.
- 山本 力 1992 面接過程における「いないいないバァ」の危機と分離不安 心理臨床学研究 **9**(3) 70-82.
- 山本都久 1984 中学生の自己概念と不安, 疎外感, 社会的地位, 学業成績との関係 富山大学教育部紀要 A(文化系) **32** 43-49.
- 横田正雄 1989 登校拒否論の批判的検討 — 1 — 母子分離不安論の登場まで 臨床新理学研究 **27**(2) 56-61.
- 横山博司 1982 予測効果と状態不安 徳山大学論叢 **18** 233-242.
- 横山博司・生和秀敏 1983 不安に関する実証的研究(9) — 嫌悪刺激の不確実とイメージで媒介された不安との関係について — 日本心理学会第47回大会発表論文集 646
- 横山博司・生和秀敏・岩永 誠 1984 不安に関する実証的研究(14) 日本心理学会第48回大会発表論文集 639
- 横山博司・黒川正流・生和秀敏・岩永 誠 1985 不安に関する実証的研究(18) 日本心理学会第49回大会発表論文集 682
- 横山博司・生和秀敏・岩永 誠 1986 不安に関する実証的研究(23) — 指標間差異に関する検討 その1 — 日本心理学会第50回大会発表論文集 605
- 吉田昭久・小熊 均 1988 Time Perspective と Personality との関連 — 7 — 「実存不安」を指標として 茨城大学教育学部紀要人文・社会科学・芸術 **37** 107-127.
- 吉田一成・岩永 誠・岩崎貞徳 1988 不安喚起事態の差異に関する検討 山口大学教育学部研究論叢 第3部 芸能・体育・教育・心理 **38** 11-17.
- 吉田直樹 1991 不安 (今泉ほか編) 人生周期の中の青年心理学 北大路書房 63

— 1993. 9. 30受稿 —

## 付 記

本研究は、平成5年度筑波大学心理学研究科博士課程の青年心理学特講Ⅰの講義の際に収集された文献の内、不安に関する部分を中心にまとめられたものです。本研究をまとめるにあたり、筑波大学心理学系落合良行先生には、特に不安感情の文献展望に関する貴重な元唆及び協力を仰ぎました。ここに記して感謝します。